

書名：よかたい先生：水俣  
から世界を見続けた  
医師 -- 原田正純

文・絵：三枝三七子

出版社：学研教育出版  
出版年月：2013年8月  
総ページ数：133ページ  
ISBN：9784052038266



推薦者

井上奈穂

鳴門教育大学大学院准教授  
社会系コース

ある学生によると「本を読む」ことは、それなりの覚悟と勢いが必要らしい。本を読むことが難しいと考えるならば、難易度をぐっと下げたらどうだろう。例えば、ミシェル・ヌードヤン『図書館らいおん』、ルイズ・アームストロングの『戦争を平和にかえる法』・『レモンをお金にかえる法』などがある。「小学生」向けの本だからといって、侮ってはいけない。平易だが、「きまり」や「お金」、「戦争」についての見方・考え方が変わるきっかけを与えてくれる。今回は、そんな本の中から、三枝三七子『よかたい先生—水俣から世界を見続けた医師 原田正純—』という本を紹介したい。

この本のタイトルにある「よかたい先生」とは、水俣病の研究・治療を行っていた原田正純氏のことである。この本では、氏の語りを通して、水俣病に関わってきたその人生が語られている。氏は、患者の治療・原因の究明をする中で、差別を恐れ、患者を隠したい家族の思いや、病院に行くことすら難しい家族の状況を見聞きした。それを「見てしまった責任」と語り、その責任を果たすために、病だけでなく、水俣病の背景にある貧困や差別をも指摘し続けた。さらに、水俣病だけでなく、世界各地をまわり、様々な公害の原因究明と治療を行い続けた。氏の語る「公害の被害者は仕事を選べない、生きる場所すら選ぶことができない弱者なんだ」という言葉がとても印象に残っている。文字が少ない分、情報量は少ない。よって、読みやすい。しかし、少ない分、他の様々な本へとつながる余地が充分にある。15分もあれば読める・・・と思う。是非、読んでほしい。

ところで、タイトルにある「よかたい」とは九州地方の方言で、「その場の状況を柔らかく肯定する」ときに使われる言葉である。例えば、遊びに夢中で帰ってくるのが遅くなってしまったとき、慌てて家に帰るも、お母さんの逆鱗に触れ、お説教が始まってしまった。そんなとき、おじいちゃんが「よかたい、よかたい」と声を掛ける。すると、お説教は高い確率で終了する。このおじいちゃんの「よかたい」に言葉を加えるとすれば、「無事に帰ってきたのだから、怒らなくてもいいでしょう」だろうか。子どもの頃、私もいろいろな場面で、この「よかたい」という言葉に助けられた。

読むに当たって、是非、氏はなぜ、「よかたい先生」と呼ばれていたのか。この「よかたい」という言葉が、いったい誰が、誰に、どんなときに、向けられた言葉なのかを考えながら読んでほしい。そして、その感想を聞かせていただければ幸いである。

